

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127

毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語〔十六〕

後堂 門原 信典

三教老人の序⑤
万像と私、み佛様と私。

「天下が見えた」と佛法の大意を認得された慧稜禪師ですが、玄沙禪師は「此是意識の著述(まだ頭の中の文字で捕まえただけだ)」と許されませんでした。

そこで慧稜禪師は更に次の頌を読まれます。

万象之中独露身

(万象の中に独り身を露す)

惟人自肯乃方親

(惟人自ら肯つて乃ち方に親し)

昔年謬向途中覓

(昔年謬つて途中に向かつて覓む)

今日看来火裏氷

(今日看来たれば火裡の氷)

「万象之中独露身」

この第一句このまま読めば、この世の中のとあらゆる

生命あるもの全て一つ一つがそのまま比べようのない絶対的存在というところでは「雑草と云う名の草は無い」と植物学者の牧野富太郎博士は言われたそうですが、その名のある草も一本一本は同じでは無いし、瑞應寺の大銀杏の葉っぱも一枚一枚が個々別々の存在です。

草木の名前と同じで、私たち人間は学名で言うと「ホモ・サピエンス」です。ラテン語の名詞で「ホモ」は「人」を意味し「サピエンス」は「知恵のある」といった意味だそうですが、「ヒト」|| 「知恵」さて本当にそうでしょうか。

私たちは「ヒト」と云う生命あるものとして、一括りには

出来ない万象の中の一人一人が尊い存在です。お釈迦様がお生まれになった時の誕生偈「天上天下唯我独尊」です。

先日親しい人にお孫さんが生まれて、さっそく写真を送ってもらいました。無条件で「尊い」と思いました。全てをお任せした無心無私の存在です。奇跡という言葉を使うなら、命の誕生も奇跡です。そして今生かされていることも奇跡です。

人間だけではありません。生物の進化、植物の進化を特集した番組などを見ると全ての生命が奇跡です。その奇跡は生命のままに全てをお任せすると云う無心無私のところに露れてきます。

「万象之中」とは「一―万象」(万象分の二)の私ではなく、万象||私。万象の中身が私で、私の中身は万象です。慧稜禪師の見た「天下」は、「万象」と一つの「私」だったのです。

「一―一切」(一切分の二)ではなく、「二即一切、一切即二」の私です。その私を構成しているのは六〇兆個の細胞たちと百二十兆個の細菌たち。そして同じように森羅万象の草も木も犬も猫も鳥も虫の細胞たちも細菌たちも、単体では生きていきません。

比べようのない万象の一つ一つの生命が、無心無我で施しあつて、励ましあつて、生きる努力をしながら、互いに分け隔てなく、選り好み無くお互いの生命を生かしあつているので、これが対立を絶する「絶対」です。

「万象の一つ一つ(独)がそれぞれ絶対の命(身)を露している」何年も前の事ですが、鳥取のお寺の御本寺の東堂老師と葬儀をお勤めさせていただいた時に、老師は法語で「独露の身」と読まれました。

更にこの「万象」は衣食住含めて、ありとあらゆる現象も含みます。人間にとつての吉凶禍福、出会いと別れ、生と死、そして戦争と平和、飽食と飢餓、裕福と貧困、理不尽な事件事故さえも生命はその全てをいただいで生きています。

「惟人自肯乃方親」この「万象之中独露身」は、他人からあれこれと教えてもらうものではなく、探し求めるものでもないのです。それは、私がそれを疑っていても信じていても、思っていない

いなくても、起きている時も寝ている時も、元気な時も辛い時も、嬉しい時も悲しい時も、どんな時でも私の生命は「万象之中独露身」を必ず親しく受け止めているのです。それが無条件に生かされている奇跡です。

「昔年謬向途中覓」慧稜禪師はここで「也大差也大差」と気が付くのです。「思えば今まで自分に執着して思慮分別に振り回され、全く方向違いの所に眼を向けていたようだ。いやいや、眼を向けることこそあやまりだった」玄沙禪師の言われた「意識の中の出来事」でした。「頭で思っていることは自分ではない」誰もがこの事に気づくのが難しいのです。「頭の思い」は私の主人公では無かったのです。これは本当に坐禅に取り組んで、骨がきしむような足の痛み、どうにもならぬ眠気、ジツとしてくる事の辛さ。それなのに「何にもならん坐禅を何故命がけでやるか」という疑滞を経ないとわかりません。

この身体が存在こそが私の主人公なのです。そしてこの私の身体の中身は「無限の時

間・空間・生命、そして出会い」です。そこに私の思いは入りようが無いのです。それが「万象之中」です。

「今日看来火裏氷」

火裏の中に氷。氷解と云う言葉の通り、燃え盛る火の中に、氷の塊を放り込んだら、たどころに溶けてなくなる。長い間(昔年)の私の疑滞が、(今日)凝り固まった私の自我と共にあつという間に溶けてしまつて佛様と一つに成つた。ここが「万象之中独露身」の働きです。

そこで雪峰禪師は玄沙禪師に言われました。

「不可更是意識著述(慧稜和尚はどうとう自分を超えたな)」

正法眼蔵三百則(第百五十六則「靈雲驢事馬事」)より

「ただわが身をも心をもはなちわすれて、佛のいへになげられて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくと

き、ちからをいれず、ころをもつひやさずして、生死をはなれ、佛となる」正法眼蔵生死

今、此処に生命を受け、ホモサピエンス(智慧)ある

ヒト」と呼ばれる生き方が出来るでしょうか。(続く)

テレホン法話(〇八九七)四一〇〇三三

禪のたより



坐久成勞

過度な疲労と達成感により、気力を使い果たしてしまうことを「真つ白に燃え尽きた」と表現することがあります。これは五十年以上も前の、スポ根劇画の最高傑作として評価され、実写映画化やアニメ化もされたボクシング漫画「あしたのジョー」の最終回で、対戦相手との死闘の末に敗れ、コーナーに座り込んだ主人公が言ったセリフに由来しているのだそうです。

スポーツなので勝ち負けはその時の運もあると思いますが、そのシーンを調べてみると、主人公がそのセリフを発した時の顔は、試合に負けた敗者の顔ではなく、自分の力を出し切った満足した顔にも見えました。

物事の結果ではなく力を出しきる。人が一生のうちで懸命になれる事柄は限られてくると思ふのですが、皆さんには、今現在、何か一つでも一生懸命にな

れることがおありでしょうか? あるいは、やりきったという感覚を持ったことはあるでしょうか?

私が住職をしているお寺では、月に一度、写経会、坐禅会、御詠歌の練習会を開催しています。檀信徒の皆さんのみならず地域の方々にも開放する、自由参加としておりますので、月によって、会によって、集まる人数はバラバラです。

先日、写経会にこられる八十年代後半の方とお話をしたところ、「お寺に来るまでが大変なんですよ」と仰っていました。どういうことかというところ、午前中は体操が入るので、お昼を食べると体が重たくなって横になりた。でも以前、それで一回休んだら、夜になってからやり残した感覚がでてきて後悔したのだそうです。その言葉に続けて、「こうも仰つたのです「予定をさぼってゆつくり休むよりも、やり終えたときの満足感や

健康的な疲労感、中途半端な心境では得られない開放感がある。写経を終えての帰り道で、ああやって良かった、来月また来ようという気になる。なによりも、寝る時に今日も一日やりきつたと、充実した気持ちになれる」と。こういう経験、誰しも一度はあるのではないのでしょうか。

「真つ白に燃え尽きた」と最終回で語つた漫画の主人公は、どんな気持ちであの言葉を発したのでしょうか? ああ満足した、明日からも頑張ろうという気持ちであつたならば、もしそのまま引退したとしても、試合結果に悔いを残すことなく、力強く新しい人生を歩み出したはずです。

禅語に、坐久成勞「さきゅうじょうろう」という言葉があります。心地よい充実感。もうこれ以上何も求めるものがないと言う悟りの境地を表した言葉です。やり切つたという充実感、ただ「疲れた」ではなく、また頑張ってみようというやる気や生きがいに繋がります。出来なかつた時の言い訳、失敗した時の言い訳を考へるのでなく、自

分が納得する生き方、自分が納得する行いができているかどうか、振り返ってみる時間を持つてみてはいかがでしょうか。

愛媛県晴光院 曾根隆弘師
令和五年十月十一日〜二十一日

喫茶喫飯

私たちはとかく、仕事をしながらお茶を飲んだり、会議をしながらコーヒーを飲んだり、食事しながら仕事のことを考えたり、家族や友人との会話に夢中になつたり。いわゆる、ながら仕事といわれる、何かをしなから他のことをしたり、他のことを考へたりしてしまうことがあります。

北海道のお寺にいた頃、近くのお檀家さんの家に命日のお参りに伺つたときのことです。このお檀家さんは、お参りの後いつもコーヒーを出してくれる方でした。その日も、お参りが終わると、いつものように「おっさん(お寺さん)、ありがとう。今、コーヒー出すから」と、私に声をかけながら台所に入っていました。私は、次のお参りの予定があるものの、コーヒーを

だしていただくのはいつもこと
ですし、そんなに時間も掛から
ないだろうと思いい「ありがと
うございます」と、笑顔で応えて
待っていました。

しかし、その日に限ってなぜ
かコーヒーが出てきません。「ど
うしたのかな？」と思っている
と、台所からなにやらカリカリ
と音が聞こえてくるのです。「あ
れ？もしかして豆を挽いている
のか？」といぶかしんでいると、
今度は、コポコポとお湯が沸く
ような音がしてきました。しか
しそれでもなお、コーヒーは出
てきません。

次のお宅のお参りの時間が気
になりだして、何度か時計を見
返しながらも、ありがとうござ
いますといった手前、次の予定
があるのでもう結構ですとも言
えませんが、私は「これはもう、
待つしかないな」と腹をくくっ
て、時計を見るのをあきらめま
した。その間、およそ二十分ほ
どだったでしょうか、ようやく
良い匂いと共にコーヒーが出て
きました。

一口飲むといつものコーヒー
と、味が格段に違うのです。
コーヒーってこんなに美味し

かったのかと感動しながら「い
つもいただくコーヒーと、豆
の種類とか、淹れ方とか、変
えたんですか？」と尋ねると、
その方は不思議な顔で「いや、
いつもと同じですよ。いつも
はお経の間に用意するんです
が、今日はすっかり忘れてし
まって、急いで豆を挽いて淹
れたんです」と仰るのです。

コーヒーを美味しくいただ
き、次のお檀家さんに向かう道
すがら、私は「同じコーヒー豆
同じ淹れ方なのに、味がまった
く違うように感じたのは、いつ
たいどういうことなのだろう
う？」と自問自答しました。そ
して「そうか、あの日以前の自
分は、出していたいたいたコー
ヒーを味わうよりも、次の予定
を気にして、きちんと味わって
いなかったんだ」と気が付くと
同時に、自分がいかに目の前の
事柄に集中していなかったのか
と反省させられる、味わい深い
一杯のコーヒーでした。

大本山總持寺の御開山鑿山
禪師さまに、喫茶喫飯【きつさ
きつぱんニ茶に逢うては茶を
喫し、飯に逢うては飯を喫す】
というお言葉があります。『お

茶を出されたときにはお茶をい
ただき、ご飯を出されたときに
はご飯をいただく』禅の教えと
は、決して特別な人が特別な
ことをすることではなく、誰
もが毎日を過ごす中で、その
時その時の一つ一つに心を尽
くして丁寧に取り組みることだ
と示されました。

ゆっくりお茶を味わう時間
を無くしてはいませんか？余
計なことを考えながらご飯を
食べたりしていませんか？そ
してももちろん、「喫茶喫飯」は
お茶やご飯をいただくときだけ
に限ったことではありません。
仕事をする時は目の前の仕事
に打ち込む、勉強する時は学
ぶべきことに集中する。掃除
する時、料理する時、日常生
活のあらゆる場面に当てはま
ることですね。

せっかくの人生です。その
ものの良さを、そのものの広
がりを楽しむ時間を持つため
にも、今、自分がなすべきこ
とに集中する。日常の生活の
ひとつひとつを丁寧に組み
むよう、心がけてみませんか。

愛媛県晴光院 曾根隆弘師
令和五年十月二十一日〜三十一日

◆ 有所得の心

近所のスーパーに買い物に
行った時のこと。駐車場へ車を
停めておりたところ、側溝に半
分落ちた状態で放置されたカー
トが2つ。なんでこんなところ
にほったらかしにできるんだ
と、内心もやもやとした思いで、
そのカート達をカート置き場に
持って行った。少し不機嫌な顔
になっていたかもしれない。

カートを戻してお店に入ろう
としたときに、後ろから両肩を
ポンつと叩かれた。びっくりし
て振り返ると、近所の和尚さん
がニコニコと笑いながら手を
振って去って行かれた。

どこから見られていたんだ
ろう？カートを回収していた
ところを見て、感心感心、と
いう挨拶だったのだろうか？
または不機嫌そうにカートを
持つていくのを見て、そんな
顔をするんじゃない、という
励ましの挨拶だったのだろうか
か？そもそも何のことはない、
顔を見かけたから挨拶してく
ださったのだろうか。

そんなことに思いが巡って
いるうちに、自分の中にある、

人から良く思われたいという
気持ちに気が付いた。カート
を回収していた時はそんなこ
とは思っていなかったつもり
であるが、知り合いに会った
途端、評価が気になったので
ある。何とも情けなく、恥ず
かしい気持ちになった。

道元禅師様はお弟子様方に
対して、有所得の心、つまり
名誉や利益の為にという思い
を持つべきではない、と何度
も何度もお示しになられてい
る。それだけ大事な事であり、
当時の修行者にとっても、難
しいことだったのだろう。

『字道用心集』にも、誉めら
れれば、やるべきでは無いこと
をやるし、誉められなければや
るべき事でもやろうとしない。
そんなことではいけないとお示
しになられている。

名誉や損得を考えて動けば、
大切なことを見失う。評価の
ためでは無く、ただ当たり前
を当たり前に出来るよう、日
常から心がけ、実践してい
きたいものである。

瑞應寺専門僧堂 副悦 古川承久
令和五年十一月一日〜十日

